

荒井会計通信



発行日 平成 20 年 9 月 16 日(火)

発行者 〒162-0825

東京都新宿区神楽坂 3-1-17

ハイポイントビル 5 階

荒井会計事務所

TEL 03-3235-5180

FAX 03-3235-5190

戦後 60 年の「躁の時代」を経て日本は「鬱の時代」を迎えたと作家の五木寛之さんは言う。『日本は高度成長期やオリンピック、万博に象徴される「躁の時代」を終え、バブル崩壊後の低迷期を経て、今「鬱の時代」を迎えたと考えている。身の回りをみればすべて鬱の様相を呈している。がむしゃらに働いたり、遊んだりする躁の生活様式に対し、ロハス、スローライフ、エコロジー、メタボそしてテロとの戦争等は鬱のそれだ。躁が 50 年続いたのでだから、鬱も 50 年はつづくともみるのが自然だろう。』(7/30 日経夕刊「夕刊文化」鬱の時代を迎えた日本より抜粋：作家 五木寛之)

荒井昇の辛コラム⑱

【躁(そう)の時代から鬱(うつ)の時代に】

日本人が鬱状態であることを私も実感している。このコラムで取り上げてみた。今の日本の現状は、収入は増えない、逆に社会的負担・支出は毎年増えつづけ、以前では考えられない事件が多発し、社会に閉塞感が漂い、暗いトンネルの中に入って、出口が見えない状態である。そして、その責任(抑圧)を他人や社会に押し付け、自己嫌悪に陥りもがいている。高齢化社会、少子化、家庭崩壊、男性の女性化、女性の男性化、グローバル経済化、環境破壊等すべて、躁の時代の負債である。



《鬱の時代を生きぬくには、今までの躁の思想ではなく、鬱の思想が必要である。》

また五木寛之氏は次のように記している。『「鬱」を広辞苑で引くと、「草木の茂るさま。物事の盛んなさま」と出ている。鬱はもともとエネルギーのある状態を指す言葉だ。青年志士たちの「鬱然たる野心」とか「鬱然たる大家」「鬱然たる樹林」など、すべてエネルギーと生命力を表している。その力が出口を失っている状態である。鬱の時代に人間が鬱の気分になることは自然なことで、その気分をよりよき方向に向けていけばいい。』そして氏は鬱の時代を生きるには『「鬱の思想や鬱の政治、経済学が必要になる。」それは、収入が減っても結果においてプラスを出す。老いても衰えること枯れることにはよい面があり、それを発見する。未来を語るより、過去を見直す。登山でも登りがあり下りがある。下りには余裕があり美しい花や雷鳥にも気づき、下界の景色も楽しめる。これからは、下りの文化を磨けばいい。』

《経済の衰退は、決して悪いことではない》

この辛コラム欄で過去記述したが、資本主義経済は既に崩壊している。しかし崩壊後に形成される現実社会は惨憺たるものであるが、そこには躁の時代の人間破壊とはまったく逆の、自然界と調和した生活環境が育成されていく。

【世界資本主義経済のバブルの崩壊とその規模】

さて前回 VOL18 号で米国の土地のバブルは約 4,000 兆円。また、米国株式のバブルは約 2,000 兆円である。土地のバブルの内約 2100 兆円が借入金で賄われている。内訳はサブプライムローン(160 兆円)プライムローン(1440

兆円)商業不動産ローン(500 兆円)である。2008 年 8 月末段階で米国不動産の実勢価格はピーク時から約 50% 下落している。上記ローン 2100 兆円の 50% の 1000 兆円超が既に不良債権化している。この不良債権として現実をおびてくるのは今年 11 月である。上記ローン下落と株価の下落(現時点 400 兆円)の影響により、すでに景気は失速している。これから失業者の大幅増加(失業者は直近では 10~15% に増加、最悪期に約 20~25% に達する)個人消費は急減速する。企業業績も失速する。これに反応して今年後半にかけて世界株価と債券(短期国債を除く)は暴落する。これらがまた不動産価格の暴落を誘発する。負の金融スパイラルであるが、最低今後 4 年間つづく。最終的に米国の不動産価格はピーク時(2006 年秋)の 1 割の価格に下落し、株価は今の 11,000 ドル台から 1/10 の 1,000 ドル台に下落する。不動産、株価、債権の暴落による不良債権は 4000 兆円を超える。米国の国家予算の適正規模は 120 兆円(2008 年度は約 300 兆円)であり、これを国家で負担するのは不可能である。2009 年には世界金融恐慌が起きる。日本の東京株式市場も暴落し日経株価は今の 12,000 円台から 1/3 の 4,000 円台に暴落する。そして、米国は 2010 年に崩壊し、国家破産する。次号に続く』

お祭り

山岸 弓子

私の母の実家は、伊豆の下田にあります。私は東京生まれの東京育ち、父の実家も東京だったため、子供の頃からお正月・春休み・お盆にはいつも下田に遊びに行っていました。お盆には、下田太鼓祭りというお祭りをやっていて、お神輿やお道具に、各町 15 台の太鼓台が練り出し、町中を練り歩きます。この様式は江戸時代、第二代下田奉公今村伝四郎が制定したもので、大阪夏の陣に大勝した徳川方の軍勢が大阪城に入城した節、徳川の威風を宣揚し志気を鼓舞して堂々と入城した陣太鼓をまねたもの



といわれています。太鼓台は、日中は各町それぞれ異なった人形が飾られ、夜は夜飾りに提灯をたくさんつけて町中練り歩きます。私の伯父は、太鼓の名人で有名でしたが、私もこの血を引き継いだらしく、お祭りが好きで、お祭りの 2 日間はお神輿や太鼓台のあとを追っかけて町中飛び回っています。今年の夏も下田に行き、お祭りを満喫してきました。

【編集後記】本業 VOL19 号は 8 月に発行する予定でした。発行遅延により、山岸弓子嬢の「お祭り」の記載のタイミングがずれてしまいました。お詫びいたします。